未来へのプレリュード

宮古市立第一中学校　三年　鳥居　紗季

「未来の自分」について考える時、まず最初に思い浮かぶのが「高校入試」だと思う。中学三年生の私にとっての「未来」への第一歩は高校を受験し、そして合格しなくてはいけないのだ。

私の将来の夢は二つある。まず一つ目は、心療内科医として患者さんの「心の声」に静かに耳をかたむけ、的確に治療方針を決定し信頼される医師になること。出来れば医師不足でもある地元で多くの患者さんと向き合いたいと思っている。

そして、大好きなピアノやフルートの演奏会を病院内でしたいとも考えている。

もう一つの夢は「音楽」を生涯続けること。私は、四才からピアノを習っている。習い始めたきっかけは、家の中で流れていたフジコ・ヘミングの曲だった。その繊細な音色は私をピアノのとりこにした。母の古いピアノを

毎日あきることなく弾いていた。そのうちピアノ教室に通うようになった。私と同じ年の子供のいるその先生は優しくドレミの音階や指づかいを教えてくれた。初めて弾いた一曲を私は一生忘れることはないだろう。

それまでの私は、どちらかというと感情を表現することが苦手で、友達ともうまくコミュニケーションがとれず泣いてばかりで、いつも先生や母を心配させていた。

でも、ピアノを弾いている時だけは、別の

自分になれる。そんな感覚が好きだった。

私にとってのピアノは、ただ音を出すだけの「道具」ではなく、家族であり親友であり時にはライバルでもあった。

基本的なことが解かると、もっと理解したい気持ちと自由に弾きたい気持ちとが交差して戸惑うことが多くなった。

私のそんな気持ちを母は常に受けとめ、理解しようとしている。見えない部分でそっと助けてくれる母に心から感謝したいと思う。

好きであること、それを特別な才能に変えていくことはとても厳しく難しいと思う。その厳しさを私は本当に理解しているだろうか。

テクニックを磨くことは大切だけれど、それば かりに執着し、人の心に届くような演奏をこれまでしてきただろうか。勿論、私にはそんな才能は持ち合わせてはいない。もし、それに代わる「何か」を私が持っているならそれは地道に努力することだけかも知れない。

「才能」は英語で「ギフト」という。天か

ら与えられた贈り物という考えらしい。でも、それは自分のものであって自分だけのものではない。特別な贈り物を贈られた人はそれに感謝し精一杯活かさなくてはいけないのだ。

私にとっての音楽は、音を楽しむことより音を学ぶ「音学」や「音が苦」になってはいないだろうか。もっと肩の力を抜いて、まるで呼吸をするように自然なことだと教えてくれたのはピアノの先生だった。先生は、演奏以外でもさまざまなことを私に教えてくれる。

音楽はこんなにも楽しくてエキサイティングで奥が深くて、手に届きそうで届かない宝物のようだ。

幼い頃、まだ字も読めない私に母は映画や音楽会へ連れて行ってくれた。時には車で何時間もかかるコンサートホールへも出かけてはいろいろな話をしてくれた。その時はあまり分からなくても、そういった経験が今の私の一部になっていると思う。

あなたの体の大半は勉強と音楽で出来ている。と以前誰かに言われたことがある。私にとって最大のほめ言葉だと思う。食事をする、睡眠をとる。などのごく日常の生活の中にも私には音楽がある。

「あきらめなければ神様はきっと微笑んでくれます」。

この言葉は世界的ピアニスト辻井伸行さんの母いつ子さんの言葉だが、ただひたむきに音楽と向き合う辻井さん親子を心から尊敬したいと思う。

コクヨ　ケ-10　20×20

私は、辻井さんのように自分の将来を「ピアニスト」と明確にはしていない。ただ、音楽といつも真剣にそして身近に感じていたいと思う。そのための日々のレッスンも私には大切な時間であり、唯一「自分」を表現できる場でもある。この時間があるからこそ私は私でいられるのだ。

「天職」という言葉がある。「コーリング」と英語ではいう。これは、神様に呼ばれて就いた職業のことだ。

未来の私の二つの夢の共通点は「心」だと思う。十五年間生きた中で見つけた二つの夢をできることなら叶えたいと思う。

自分を信じ夢を信じそれをあきらめなければ必ず道は開かれる。

いつか私も疲れ希望を失った人の心の奥にしみ込む演奏をしたい。大きなホールでなくてもいい。音楽を愛する人、全てが愛と夢をわかち合える演奏がしたい。私だけのプレリュードを。

県名	岩手県